

2012年 2月23日・「下野新聞」では

難解さで埋もれた詩人

逸見猶吉（旧谷中村出身）

「兇牙利」に新説

旧谷中村（栃木市）出身の詩人逸見猶吉（1907～46年）のレトリックに満ちた詩作の全容を明らかにした評論集「詩人 逸見猶吉」（コールサック社・2100円）が出版された。著者で千葉市在住の詩人尾崎寿一郎さん（82）は、作品の難解さから埋もれてしまった猶吉の生涯と詩作を半世紀にわたり探究。猶吉が北海道を放浪後、発表した詩「ウルトラマリン」3部作の第2作「兇牙利」で、読みと意味が不明だった「兇牙利」を「きょうがり」と読み、猶吉の劣等感などが自我を占有、何か憑かれた状態が生じる「憑依現象」であるとの新説を盛り込んだ。（石川文子）

千葉の詩人が評論集

憤りが生んだ憑依体験

猶吉については県内でも茂木町在住の詩人森羅一さん（65）が評伝を執筆中。出生地の茨城県古河市の古河文学館も掘り起こしに取り組むなど、猶吉再評価の動きが続いている。

逸見猶吉は本名大野四郎。足尾鉍毒事件の舞台旧谷中村の、祖父は初代、父は2代目（最後）の村長。旧藤岡町に合併された翌年、旧古河町で生まれ、廃村後、家族と上京。早稲田大卒。35年に草野心平、足利市の岡崎清一郎らと詩誌「歷程」創刊。43年、関東軍報道隊員として旧満州（中国東北部）北部に派遣されたが、46年に肺結核と栄養失調のため新京（長春）で死去した。38歳だった。

猶吉は学生時代、木下尚江の「田中正造之生涯」を読み、谷中村鉍毒事件で銅山側についた祖父や父の裏切りを知り、北海道を放浪。「ウルトラマリン第一・報告」など3部作を相次いで発表する。

猶吉の詩はわずか40編。エネルギーに満ちた作品の魅力にとりつかれた尾崎さんは、印刷職人や編集業務の傍ら研究を続け、2004年に「逸見猶吉 ウルトラマリンの世界」、06年に「逸見猶吉 火檻襖篇」を刊行。増補改訂版となる今回は、詩作の根源に迫るため「兇牙利」の解釈に取り組んだ。

「兇牙利」は猶吉の造語。「ハンガリー」とする見方もあったが、表記の問題から退け、その鬱積する劣等感と権力・軍国主義に対する憤りが「兇牙利」の憑依現象を生んだとした。

「レイタンナ風ガ渡リ ミダレタ髪毛ニ苦シク眠ル人ガアリ シバラク太陽ヲ見ナイ 何処カノ隅デ饒舌ルノハ気配ダケカ…」

猶吉は善も悪も精神の牙をあらわにして詩を書いた。ウルトラマリンの一連の詩は、詩意は理解されなかったが、多くの読み手に衝撃を与えたという。だが猶吉はこの兇牙利に疲れ、妻子を守る生活に逼迫。「兇牙利」はペルソナ（表面の外的人格）だったという。

同時代、後代の詩人が何人か解釈を試みた猶吉詩。尾崎さんは「獣みたいなエネルギーの答えがようやく書けた。昭和18（43）年まで日本の権力に真っ向から逆らい、ぶざまに負けたすごい詩人だ。このすごさを広めたい」と話した。

「新説」議論の契機に

茂木の詩人 森さん指摘

尾崎寿一郎さんと同じく逸見猶吉研究に取り組む茂木町在住の詩人、森羅一さんは、尾崎さんがフランスの

詩人ランボーとの近似性を指摘した点にヒントを得て「読み解けなかった逸見の作品になお挑戦している」という。

「尾崎さんは逸見の生きた同時代感覚を持っている」といい、従来の逸見論より「はるかに深く掘り下げている」と高く評価する。

ただ「兇牙利」を「憑依現象^{びょうい}」と解釈した新説には「違和感があるが、研究に際して議論になるのでは」と指摘した。

「詩人 逸見猶吉」には森さんの研究の一部も登場。詩の背景に贖罪意識^{しよくざい}があったとする見方は一蹴したが、旧満州（中国東北部）で勤務した「日蘇通信社」が民間を装った軍の機関のようだったと明らかにした点は「猶吉の生きざまが分かる貴重な資料」としている。

と紹介されています。